

2. 研究の詳細

プロジェクト名	学習者の学びを促進させる教師の単元展開の実践的思考の研究		
プロジェクト期間	2018年度（平成30年度）		
申請代表者 （所属講座等）	坂井清隆 （教職実践講座）	共同研究者 （所属講座等）	
<p>1. 研究の目的</p> <p>本研究は、単元計画と実際の展開との差異に着目し、教師自ら開発した単元の意味や特徴、子供の関心事やこだわりを適切に捉えて単元展開に生かそうとする実践上の意思決定の姿を明らかにすることを目的とする。</p> <p>2. 研究の方法</p> <p>(1) 単元展開の様相—解釈</p> <p>本研究では、単元展開の内実（単元の教育内容）を明らかにするために、「様相—解釈」を研究方法の一つとして採用する。「様相—解釈」とは、田代（2010）が開発した、実践者の指導性や授業の特徴、子供の思考・活動を関連的に明らかにする授業実践の研究方法論であり、授業の構造的全体像を感覚的に把握できる「様相」（田代は「発言表」として形式化している）として示し、授業の逐語記録である「授業記録」と併せて解釈を行うものである。本研究では、この「様相—解釈」による授業研究の方法論を援用して、「単元」の展開過程を具体的に「様相」として明示し、子供自身の学びの姿や、教師と子供の関係性などを把握する研究方法を採用する。</p> <p>「単元の様相—解釈」は、実践者が事前に計画した単元と実際に展開した単元の差異を「様相」として示し、その上で、抽出児やその他子供の言動、教師の働きかけと関連付けながら「解釈」を行うものである。この解釈を行うことで、単元が生成・発展していく有り様を捉えると共に子供の学びに関連した教育内容が明示できると考える。単元が「動く」きっかけとなった子供の発言や、学習の発展に繋がった子供の発言、さらには子供の要望などを事実即して記録するようにする。このことは、単に上記のような事実を記録するに留まらず、実際に単元をマネジメントしていく際に活用できるものである。つまり、ソートン（Stephen J・Thornton）が「すなわち、教師が主体的な調節者になること（＝ゲートキーピング）が、単元がどんな形態をとっているのかといったことよりも、実際の単元や授業にとってより重要なことだ」（2012 p30）と指摘するように、実践者が単元をどのように展開したのかといった実質的なマネジメントの有り様を明らかにし、単元展開の力動感を表現することは、非常に重要な意味をもつのである。</p> <p>「解釈」に関しては、上記の「単元の展開—相関図」と、子供の諸資料（個人記録やワークシート、授業記録など）とを用いながら、子供の学びの姿を質的に捉えていく。このことについて、田代（2011）が、「真に実効性あるカリキュラムを考えるためには、例え複雑であっても（中略）カリキュラムの展開・変化の具体的な様相を丁寧に見ていくことが必要である」と述べているように、これまでブラックボックスであった単元展開の過程を「様相」として示すことは、実質的な教育内容（子供が何を身に付けたか）を可視化することにつながると言えよう。</p> <p>現実の単元展開では、教師が予めねらいとしている資質・能力が、授業が進むにしたがって予定調和的にストレートに育成されていくものではない。それは、子供の行動が、日常的な文脈（context）において、生成されたり意味づけられたりしながらその子なりの学びとして形成されていくからである。よって、教師は、子供の実態や学びの手応え、つまずきなどを踏まえながら、単元の改善を図りつつ重層的に組み替えていっているのである。このような「行為の中の省察」を通して、具体的な事実をもとに学びのプロセスを追究し「実践の中の知」を発見することが重要なのである。</p> <p>これまで述べてきた通り、実践した単元の提示と同時に、実際の流れを記述することは、まさに自己の実践を対象化しメタ的に見つめることにもなる。いわば、自分の実践を現実のものとして直視しつつ、それを批判して相対化し、新しい方向性を照らし出す機縁になるものであるといえる。</p>			

(2) D-OODA サイクル

マネジメントに関しては、従前の PDCA サイクルに対して、D-OODA サイクル（田中 2016）をツールとして措定した。「D-OODA サイクル」とは、形式化・硬直化・自己目的化しやすい PDCA サイクルに対し、Design（デザイン）Observe（観察）Orient（方向付け）Decide（決心）Act（実行）のプロセスにおいて、実践対象に柔軟に対応しつつ意思決定を行っていく新しい組織マネジメントの概念である。この D-OODA サイクルを援用しつつ、学習者の問題意識やこだわりを把握しながら臨機応変に単元を展開していく力は、どの教師にも要求される資質・能力であると考えられる。このことを踏まえると、「単元の様相—解釈」を通じた教師のリアルな D-OODA サイクルの姿を明らかにすることは、これから求められる教師の実践的力を向上させていく方途を明示する上で意義あるものである。

したがって、このような単元展開の D-OODA サイクルに着目したとき、教師の実践的思考の働きを検討し、それを基にして単元展開における意思決定の働きに関する諸要因を解明していくことは、教員育成指標で示される教員養成期・教員基礎期における研修プログラムにも応用が可能となる。

D-OODA サイクルモデルに関しては、まず、教育実践への援用方法や留意点について検討を行った。次に、単元を展開する際に総合的に働く諸能力の析出のために、実践者の「勘」や「コツ」といわれる暗黙知に焦点化して、仮説的に析出した。仮説的に析出した単元展開の諸能力を参考にして、単元の実際の展開に基づきながら、筆者が援用した D-OODA サイクルの諸観点に基づき、教師の実践的思考の様相について分析・検討を行った。その際、申請者と研究協力者が協働して、授業における学習者、学習者同士、教師の言動を解釈していくことによって間主観性を担保した。

3. 研究の内容と対象（実施の体制）

L 市立 F 小学校勤務の K 教諭（研究主任）に対して、5 月と 12 月に半構造化インタビューを実施した。また、K 教諭の 5 月と 12 月の実践に対して、「単元の様相—解釈」を実施した。その後、「単元の様相—解釈」を行った。

4. 柔軟な単元展開を意識した教師の思考

K 教諭のインタビュー内容と「単元の様相—解釈」を対象に、D-OODA サイクルの 5 つの観点から考察を行った。

Design（デザイン）：K 教諭は、「教材研究」から、子供の学習の大筋、いわば子供の学びを「見通す」意識をもっている。指導要領の目標に即しながらも、子供の実態（何を学びたいか、何にこだわりをもっているか、どのようなズレがあるか）と併せて教材の目標（何を学ばせたいか）を模索していたことがうかがえる。このことは、従来の教師が教えるべき内容を配列した「単元計画」とは異なっており、大筋は示しつつも、子供の興味や関心、ひっきりなりに応じて常に「変更可能」な状態を担保していることを意味している。

Observe（観察）：K 教諭は、1 コマの授業ごとに児童の実態把握を熱心に行っていた。教材（H 公園がつくられるまで）を提示した後の子供の反応をつぶさに記録し、子供の「出方」を丁寧にうかがっていることがわかる。K 教諭は、日常的に遊んでいる公園にトイレがないことに子供が疑問をもったことに気づいた。ここで、「公園には当たり前前にトイレがある」こととのズレを生かそうと考えた。

Orient（方向付け）と Decide（決心）：K 教諭は、従来学習問題は、自身が設定し提示していたが、子供を観察した結果、疑問である「なぜ市が作った公園なのにトイレがないのか」を学習問題とすることが、本教材を追究していくことにつながると判断し、新たな方向付けを行っている。つまり「どのような学習問題を設定すべきか」「どのような学習問題が子供の追究意欲を喚起するか」ということを、K 教諭のこれまでの経験知や研修で得た学習デザイン理論を生かして状況を判断していることがわかる。さらに、このことにより、微細な方向付けと意思決定がほぼ同時に行われていることがわかった。

Act（実行）：K 教諭は、1 単位時間の授業の流れについて、意思決定を繰り返していることがわかった。事前の構想とは異なった前時の授業を受け、本時の授業は、前時のまとめを生かしながら展開していった。「実行」（ここでは発問や指示）においては、「方向付け」「決心」の一連のプロセスから子供の出方を探り、さらなる「実行」を行っている。また、場合によっては再度「観察」するこ

ともあった。PDCAのように計画したものを実行し評価・改善するプロセスではなく、何度となく「観察→方向付け→決心→実行」のループを描いて、子供の学びを促進させていこうとする教師の思考が働いていることがわかった。

5. 研究の成果と課題

本研究は、単元展開の可視化のために「単元の様相一解釈」を採用し、柔軟な単元展開を可能にするものとしてD-OODAサイクル理論を位置づけている。このことによって、「単元の相一解釈」というエビデンスに基づきつつ、柔軟に単元を展開し、子供の学びを促進させようとする教師の意識について考察した。

その結果、K教諭は、教育内容としての教材研究にとどまらず、子供理解、そしてK教諭自身の単元観（子供の学習をデザインしていくこと）・子供観（子供のこだわり、学びの可能性など）の捉え直しを促進していったことが明らかになった。また、K教諭へのインタビューから、K教諭が意識して行ったD-OODAサイクルから得られた知見は、単に社会科の単元展開のみならず、小学校教師として他教科への援用を図っていることも明らかになった。この意味においては、具体的な単元展開の改善の方途を見出すとともに、K教諭自身の教育観・授業観の更新によって、さらなる自己形成に向かいつつあると考える。

ただ、単元展開に関する実践的力は一朝一夕に身につくものではなく、誰にでも適用可能な研修が存在するわけでもない。そうであるならば、多少時間や労力がかかるけれども、教師自身が、自らの実践を客観的に捉え、単元を柔軟かつ弾力的に展開していく方途を日常的に摸索するようなD-OODAサイクルを自身で駆動させていくような研修を積み重ねていく必要であるとともに、大学教員としてもそのような研修の機会を提供していくことが求められる。このような研修の機会を通して、自己の教育観が揺さぶられつつ、実践的な力量形成が着実に行われると考える。

今後の課題として、単元の柔軟な展開を、単なる「技術」の向上にとどまらせず、教師としての職能全般の包括的向上につなげていく研修システムの構築を目指すことを挙げておきたい。

6. 今後の予想される成果

今後の予想される成果に関しては、特に社会的効果（新採教員研修等の深化・充実）について言及しておきたい。近年、各自治体では、教員育成指標が策定されている。そのキャリアステージの基礎期において、単元展開の事実に基づいた「様相一解釈」を組み込んだ研修等の実施によって、単なる教育技術の向上に留まらず、学び続ける教師としての信念や教育観の深化が図られていくことが予想される。そのためには、教育方法学、特に授業研究を学問的専門とする大学教員の協力や支援が欠かせない。

7. 研究の今後の展望

今回の研究は、特に単元展開を対象としたものである。今後の研究の展望としては、このような単元研究を、カリキュラム評価研究に援用・拡大していくことである。小学校学習指導要領（2017）総則では、これまで、管理職が中心に行ってきた教育課程レベルのカリキュラム・マネジメントが、単元レベルや日常的な授業レベルにおいて、どの教師にも求められるように示された。従って、今後の研究では、特に教科等横断的な学習（単元）設計力・評価力としてのカリキュラム・マネジメントに着目した研究を進めていく必要がある。教師にとって、カリキュラム（ここでは単元の意味）を自ら開発・構成し、子供の学びに応じながら柔軟かつ弾力的に展開していくことは、かなりの経験知を積み上げる必要がある。特に、若年教師が、より実効性のある単元レベルのマネジメント（子供の学びを促進させるような）が実践できるようにするための研修プログラム等の構築は喫急の課題であると考えられる。

8. 主な学会発表及び論文

本研究に関しては、2019年9月の第28回教師教育学会及び10月の第55回日本教育方法学会において、研究の成果の一端を発表する予定である。また、論文に関しては、教師教育学研究に投稿する

予定である。